

幼児の音楽表現における段階的・継続的指導の実践に関する一考察 —豊かな表現による歌唱活動に着目して—

長谷川恭子*・前田智子**

* 生活文化学科 音楽教育研究室 ** 生活文化学科 非常勤講師

A Consideration on Practice of Gradual and Continuing Instruction for young children make musical expressions
～ Focus on young children expressing rich singing ～

Kyoko HASEGAWA, Tomoko MAEDA

Department of Human Sciences and Arts, Jissen Women's University

The purpose of this research is to consider the practical implementations of gradual and continuing instruction of young children in making musical expressions, and based on that, we examine the effect of guidance in this area. In Japan, nursery child care guidelines were announced in 2017. The representation area shows that it expresses what you felt from the young children living environment and friends share motivation by sharing expressions with each other. As a result, it is necessary to provide gradual and continuing instruction in music education which is a part of the representation area.

In this research, we introduced the process through which young children experience creative musical expressions via onomatopoeia. By doing this, we tried to enrich the singing expressions of young children. The use of onomatopoeic expressive activities as an introduction of the process makes it possible for young children to enjoy expressions. This raised the motivation for music expression. In addition, indirect communication among young children raised the effect of enriching singing expressions.

Key words : young children (幼児), creative musical expression (創造的な音楽表現), gradual and continuing Instruction (段階的・継続的指導), singing (歌唱), onomatopoeia (擬音語)

1. 問題意識と研究の目的

1-1. 問題意識

保育において、音楽は「表現」領域を構成する要素の一部である。長谷川 (2016) は、保育における表現とは「豊かな感性を養うことであり、表現することへの意欲をもつこと」であるとし、「豊かな感性は、表現を通してさまざまな心情を体感することの積み重ねにより養われます。そのなかでも、美しいものを〈美しい〉と感じ、〈感動〉する体験を、幼児のうちからしておくことが大切です (中略) 〈美しい〉や〈感動〉が、子どもの感性をより豊かにし、人間性の成長につながります」(p.20) と述べている。

平成 29 年告示保育所保育指針 (以下、保育所保育指針) では、「生涯にわたる生きる力の基礎を培う

ための「育みたい資質・能力」として、「豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かたり、できるようになったりする『知識及び技能の基礎』」「気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする『思考力、判断力、表現力等の基礎』」「心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする『学びに向かう力、人間性等』」の 3 つを挙げている。これらの三本柱に基づいた資質・能力の育成を目指し、保育においては「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として 10 項目が挙げられている。このひとつに、「豊かな感性と表現」として、「心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表

表1 保育所保育指針における保育に関わるねらい及び内容（「第2章 保育の内容」より抜粋 ※は筆者加筆）

	乳児保育：表現の基礎段階 [※]	1歳以上3歳未満児：表現の応用段階（個人） [※]	3歳以上児：表現の応用段階（共有） [※]
領域	ウ 身近なものと関わり感性が育つ 身近な環境に興味や好奇心をもって関わり、感じたことや考えたことを表現する力の基礎を培う。	オ 表現 感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。	オ 表現 感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。
ねらい	①身の回りのものに親しみ、様々なものに興味や関心をもつ。 ②見る、触れる、探索するなど、身近な環境に自分から関わろうとする。 ③身体の諸感覚による認識が豊かになり、表情や手足、体の動き等で表現する。	①身体の諸感覚の経験を豊かにし、様々な感覚を味わう。 ②感じたことや考えたことなどを自分なりに表現しようとする。 ③生活や遊びの様々な体験を通して、イメージや感性が豊かになる。	①いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。 ②感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。 ③生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。
内容	①身近な生活用具、玩具や絵本などが用意された中で、身の回りのものに対する興味や好奇心をもつ。 ②生活や遊びの中で様々なものに触れ、音、形、色、手触りなどに気付き、感覚の働きを豊かにする。 ③保育士等と一緒に様々な色彩や形のものや絵本などを見る。 ④玩具や身の回りのものを、つまむ、つかむ、たたく、引っ張るなど、手や指を使って遊ぶ。 ⑤保育士等のあやし遊びに機嫌よく応じたり、歌やリズムに合わせて手足や体を動かして楽しんだりする。	①水、砂、土、紙、粘土など様々な素材に触れて楽しむ。 ②音楽、リズムやそれに合わせた体の動きを楽しむ。 ③生活の中で様々な音、形、色、手触り、動き、味、香りなどに気付いたり、感じたりして楽しむ。 ④歌を歌ったり、簡単な手遊びや全身を使う遊びを楽しんだりする。 ⑤保育士等からの話や、生活や遊びの中での出来事を通して、イメージを豊かにする。 ⑥生活や遊びの中で、興味のあることや経験したことなどを自分なりに表現する。	①生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。 ②生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。 ③様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。 ④感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。 ⑤いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。 ⑥音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。 ⑦かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。 ⑧自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。

現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる」と示されている。このことは、表現領域でこそ育成されるものであり、保育において段階的・継続的な活動を行うことが必要であることを示していると考えられる。

保育所保育指針では、表現領域における「保育に関わるねらい及び内容」について、〈乳児保育〉〈1歳以上3歳未満児〉〈3歳以上児〉に分けて提示している（表1）。表現の目的については、乳児保育は〈表現の基礎段階〉、1歳以上3歳未満児は〈表現の応用段階（個人）〉、3歳以上児は〈表現の応用段階（共有）〉と捉えられる。〈表現の応用段階〉では、感じたことを自己の中にイメージとして湧き起こすことができること（1歳以上3歳未満児）、それを自己から表出して他者に伝えることで共有して楽しむことができること（3歳以上児）を段階的・継続的に経ていく中で、豊かな感性や表現する力が養われる。

表現領域の要素の一つである音楽においても、このような段階を継続的に経ていく中で、豊かな表現力の育成を行うこととなる。幼児期では、これらを「生活の中」から感じて得ていくこととなるが、「生活」と

「音楽」をいかにつなげるか、そのような活動のひとつひとつの具体はどのようなものであるかということが重要となる。それは、保育者の導きの過程で、幼児自らの発見から自然に表出され、音楽表現に発展していくことが、創造的で豊かな表現になるのだと考えられる。駒・古山他（2009）は、昭和23年刊行の『保育要領』から今日に至るまで創造性に関わる文言が取り上げられてきたことをふまえ、「創造性の育成が重要であることは、保育に携わる者にとっても自明なことであろう。しかしながら、具体的にどのような活動が幼児の創造性を伸長させることにつながるのか、その方向性が見出せず、結果として既存曲の歌唱や器楽合奏などによる音楽活動に依存しがちなのが現状ではないだろうか」（p.1）と述べている。たしかに、近年は鍵盤ハーモニカなどの楽器を指導している園などもみられ、その演奏技術の向上に多くの保育時間を当てているような状況を耳にすることがある。あらゆる表現の要素が相互した〈表現領域〉における表現活動という場面は、それほど多くは見られないかもしれない。保育者養成課程においても、学生の弾き歌いが不得手であることが問題として長年取り沙汰されるような状

況は、未来の保育者である学生がピアノ伴奏による幼児の歌唱を独立した音楽活動として捉えることを助長しているともいえるのではないか。音楽活動におけるそれぞれの音楽表現（歌唱、器楽合奏など）の充実を図るにしても、〈表現〉領域の充実という視点を失ってはいけない。

幼児が身近なものに興味を持ち、表現に発展させる過程は、幼児の感覚を豊かにすることにつながるであろう。表現領域、特に音楽教育では、この過程をより音楽的な表現力の育成に繋げたい。つまり、自然や身の回りの物や環境を楽しむだけに留まらず、音楽表現を豊かにすることにしたいのである。そしてそれは、丁寧なプロセスを段階的・継続的に設定することにより、豊かな音楽表現をする感性が育成される。豊かな音楽表現をすることに到達することで、初めて自然や身の回りの物や環境を表現して楽しむことの意義が成立すると考える。

1-2. 研究の目的と方法

本研究では、保育における幼児の音楽教育において、音楽的な表現を充実させるために、自然や身の回りの物や環境を表現することを最終的に豊かな音楽表現に繋げるための段階的・継続的な指導について実践を行い、その指導効果について検討する。具体的には、歌唱表現の充実を目的とする。

研究の方法として、まずは「身近な」ものに関わる音楽の表現について、先行研究から示唆を得る。次に、豊かな歌唱表現のための表現力を向上するための指導について、実践をもとに考察する。その際、「身近な」ものによる表現の手段の一つとして、擬音を扱うこととする。

2. 「身近な」ものに関わる音楽表現の観点

2-1. 「身近な」ものに関わる音楽表現

それでは、「身近な」ものに関わる音楽の表現活動とは、どのようなものがあるだろうか。

矢部（2008）は、幼児の遊びの過程で音楽的表現として擬音語が展開される場面を、「遊びの内容、イメージ、身体の動き」の関連に視点を置き、検討した。その結果、「模倣」による場面で経験する「充実感、満足感、達成感、表現の次なる展開の土台として大きな意味を持つ」こと、「問答を用いた音楽的な

表現は、送り手と受け手の関係が成立し、お互いが自己の内的な世界（思考・感情・イメージ）を伝え、わかり合おうとする欲求により生み出される」ことを明らかにしている。このことにより、音楽表現の充実には、表現に対する意欲と、他者とのコミュニケーションが相互作用することが必要であることが窺える。

駒・古山他（前出）は、幼児たちが音楽活動を共有していく過程について、擬音語・擬態語を取り入れた実践を行い、事例を分析した。その結果、「人的環境としての応答性」として、「リーダーや保育者の身体的表現の重要性」（リーダーや保育者の身体性に幼児が共鳴し、身体的イメージを共有することにつながる）、「応答的な音楽活動を行うことの重要性」（単なる模倣ではなく、新しいものを幼児自身により生み出す契機となり得る）、「環境設定の重要性」（幼児の創造性を育むために、他者との関わりを持った音楽活動のための環境設定）が重要であることが示唆されたとしている。この3つは、保育において創造的な音楽活動をする際の保育者—幼児の関係性を示していると考えられる。

千田（2011）は、「子ども達が自分で表現する力を養うためには、日常生活と表現の関係を密接にするような環境作りが必要」と考え、自然や生活環境から得る音を子どもが表現する際に擬音を用いることに注目し、年中児の自由保育の時間を観察し、分析した。これをふまえ、千田は「幼児の発語や行動から音楽的なリズムを感じ取り、それらを更に音楽的な表現となるような展開をしていかなければならない」（p.81）と考察している。このことは、幼児の自発的な表現を音楽的に発展させることの重要性を示唆していると考えられる。

これらの事例は、共通して、幼児の創造性の部分の充実を図ったものだといえる。これらは音楽性の視点から分析されたものであるが、いずれも表現を共感することにより起こるコミュニケーションが、創造性の充実に至らせている。そのきっかけとなる関係性は、〈保育者→幼児〉（駒・古山他）と〈幼児—幼児〉（矢部、千田）に分かれる。さらに、これらの研究は、擬音語を表現の手段として用いていることが共通している。このことから、本論を検討するにあたり、「コミュニケーション」と「擬音語」を観点として扱うことが妥当であると考えられる。

2-2. 音楽表現における擬音語の効果

擬音語（擬声語）とは、「自然界の音響を言語音でまねて表わした単語。（中略）広い意味では擬態語も擬声語に含める」（ブリタニカ国際大百科事典小項目事典）と定義づけられる。

苧坂（2008）は、擬音語・擬態語について「“感覚のこぼれ”あるいは“クオリアのこぼれ”であるとし、「環境が原因となって生まれる主観的な心の状態」だと述べている（p.50）。また、「音声や動作で他者を含む環境内の事物の“ものまね”をおこなうことにあり、“模倣”がその原点にある」とも述べている。このような性質をもつ擬音語による主観を音楽に持ち込むことは、コミュニケーションを共感・協働に至らせる効果となり、音楽的表現の感性を豊かにするのではないであろうか。

また、藤沢・岩宮・高田（2004）は、擬音語が表現できる範囲などには制限があるが「音に関する様々な心理属性を十分に表現しうる」ものであることと、「我々は擬音語のような制限された手がかりから、元の音をイメージしたり音源を推定する能力を持っている」ことを明らかにした。このことは、擬音語が単に物を抽象的な模倣の語として用いられているということではなく、現実的な表現として捉える一助となり、理解を踏まえることで表現を豊かなものに至らせることにつながるのではないであろうか。

これらのことから、擬音語を用いる活動を音楽的な表現の手段として扱うことは、創造性を充実させる効果を挙げることにつながることが期待される。

3. 実践事例

3-1. 実践の目的

本論では、幼児の自発的な表現手段として擬音語を用いることにより、コミュニケーションを起し、さらに歌唱表現に至らせることで、創造的表現を充実させることから音楽性の育成につなげるための、指導効果の要素を実践的に検討する。擬音語を用いることは、保育における表現領域の事項を相互した活動になると考える。

3-2. 対象児達の背景

本実践は、指導者（前田）が日頃から指導をしている、将来的にミュージカルに出演することも視野に入

れた教室のボーカルクラスに所属する年長女児5名に実践を行った。ボーカルクラスのレッスンは、週1回1時間である。教室の趣旨をふまえると、幼児の活動に対する意識は一般の保育機関の幼児に比べれば高いといえるが、指導効果の要素を検討するためには、純粋な音楽的效果を抽出できる要因となると考える。幼児は身体的発達が途上であり、幅広い音域や体を使って歌うことには限界がある。そのため、年齢に応じた指導が必要である。

本実践を行う前の対象児達は、曲のイメージ（明るい、楽しそう、暗い、悲しい）は捉えることができる状況であった。また、自身の経験があれば歌詞の大きな内容を理解することができ、自分なりのイメージを捉えることができた。しかし、言葉で発しているだけで、心と身体で表現しているとは言い難い。このため、指導者は、楽譜通りに歌うことは可能であっても、音楽的な表現の向上に至っていないと感じていた。

このことから、本実践では、楽譜から離れ、純粋に音を感じる体験を通して、心と身体で表現することを最初のプロセスとした。

3-3. 実践および指導効果の検討の方法

本実践を進めるにあたり、段階的・継続的な指導のねらいやプロセスの検討については、筆者（長谷川）と指導者（前田）で行った。これをもとに、実際の指導と具体的な実践内容の設定については、指導者が対象児の様子を見ながら行った。実践期間は、2017年4月から7月である。

3-4. 対象児AおよびBについて

上記の実践を分析するにあたり、本論ではクラスの対象児の中からA、Bに着目することとした（表2）。この理由としては、AとBはレッスンに休むことなく参加しているが、他の幼児は休んだり途中から参加しているなどの理由があり、継続的・系統的な指導効果を検討する条件が揃わないからである。

3-5. 事例の内容と対象児の様子

1) 導入：お気に入りの音を探そう

はじめに、教室のスタジオの中で、耳を澄ますとどのような音が聴こえるか、指導者が問いかけた。対象

表2 対象児A・Bの実践前の様子

対象児	年齢	指導期間	普段のレッスンでの様子
A	6歳 (年長)	1年 (5歳～現在 に至る)	<ul style="list-style-type: none"> 陽気な性格である。 挑戦欲があり、新しい取り組みに対しても躊躇しない。 クラスを中心に立って引っ張っていきたい気持ちが強い。 以前は音域が狭く、高音になると苦戦していたが、最近は気持ちが先行するようになり、高音もでるようになってきた。 イメージ力が高い。目に見えないものを見えているように表現することが得意。その際には、表情もいきいきとしている。
B	6歳 (年長)	1年 (5歳～現在 に至る)	<ul style="list-style-type: none"> 真面目な性格である。 新しい取り組みに対しては、躊躇したり人の動きを見てから動くことのほうが多かったが、最近は自分で行動を考えられるようになり、変化が見られている。 挑戦してできたことが、成功体験となり、次への自信へ繋がるようになった。以前は、緊張感が強く全く表情が動かなかったが、今ではいきいきとした表情で歌えるようになってきた。 歌が好きだけでなく、レッスンが好きで、家でもしっかり練習してくる。コツコツ努力している。 以前は、音程が微妙であったが、音をよく聴くことに集中できるようになってからは、音程のずれもなくなってきた。

児達には、足音、外の道路を走る車の音、電車の音(スタジオが駅近くにあるため)、カーテンの開閉の音など、日常的に耳にしている音まで聴こうと耳を傾ける様子がみられた。次に、聞こえてきた音はどのような音だったのか、擬音語で表現するように指示をした。Aは、隣の部屋から聴こえてくる足音に注目し、「とんとんとんとん」と高音の音で表現した。Bは、スタジオの外から聞こえる電車の音に注目し、『「シャーシャー」って音が聞こえた』と嬉しそうに答えた。対象児達は、普段と異なるアプローチに興味を示した。

翌週の宿題として、家の中や家族との外出先で、どのような音が聞こえたか、またどのような音が自分のお気に入りであったかを見つけてくることを提示した。この宿題について、Aは、母親が料理をする音がお気に入りだと言い、たまねぎを切るときに『「シャシャシャ」って聞こえた』と早口言葉のように何度も興奮気味に繰り返した。Bは、やはり電車の音が好きな様子で、「幼稚園の帰りにね、“ガタンゴトンガタンゴトン”って聞こえたよ」と嬉しそうに発言した。

2) 歌唱指導の様子：『線路は続くよどこまでも』

4/4拍子 26小節、音域はd¹～c²であり、ト長調の明るい曲である。軽快なリズムとほどよい音域で幼児が歌いやすい曲であることと、スタジオが駅近くに位置し、電車の音に耳を傾けられイメージしやすいことから、この楽曲を選んだ。この実践は、計4回(6月13日～7月4日まで、週1回)のレッスン内で継続的に行った。実践のプロセスは、以下の通りである。

①フレーズ作り(表3①)

- 電車の音に耳を傾け、どんな音が聞こえたのか擬音で表現する。
- 音の高低を視覚的に記す。
- 楽曲がト長調のため、G・H・Dの3音を提示。音高を組み合わせる。
- 16カウントのメロディを即興で作り、歌う。

②表現活動(表3②)

- 実際に電車に乗っている自分をイメージし、対象児それぞれで、電車になりきって動きながら歌う。
- Aメロの終わりまで歌い、サビに入る前に16カウントの即興(①)を取り入れる。
- サビは軽快なリズムを感じながら再び動きながら歌う。

この実践による、対象児A、Bの様子は、表3の通りである。

表3 対象児A・Bの実践時の様子

対象児	①フレーズ作り	②表現活動
A	1回目はg ¹ 音で「シャー」と8カウントずつのぼして表現。2回目からは「ガタンシューガタンシュー」とd ¹ 音、g ¹ 音の2音を組み合わせ合わせた。4回目では「ガタンシューガタンシュー」を8カウント表現したあと、「駅に電車が止まった時には『シュー』と高い音がするんだよ」と言い、「ガタンシューガタンシュー+シュー」の組み合わせで表現した。	電車が動き出す速度や駅に入り止まる前の速度にも自ら注目し、一曲すべてを自分なりのイメージで作りあげた。電車に乗っている自分をイメージし動いている姿が、とても躍動感があり、楽しげな様子であった。
B	1回目は、『「ガタンゴトンガタンゴトン」と聞こえる』と言い、お気に入りの音探しの時と同じように表現した。2回目以降は、g ¹ 音で8カウントずつのぼして表現。だが、毎回自分の耳に聞こえてくる電車音が新鮮な様子で、「ゴー」「グー」「シュー」など、毎回の擬音は違っていた。	これまでは、自分から進んで動くより、人の動きを見てあとをついていくことが多かったのだが、回数を重ねるごとに自ら考えイメージし、進んで動いたり、表現しようとしたりする姿勢の変化が見られた。また、自ら動けるようになったことで、自信が付き、表情が明るくなった。

3-6. 指導者による事例の効果に関する考察

導入指導では、音を聞く行為について、対象児それぞれがどのように感じたのかを擬音語で表現することにより、幼児達が純粹に感じるままの主体的表現を引き出すことができた。継続的な指導を試みた結果、回を重ねるごとに、子どもたちの自発性や表現に対する欲求と思考力に関する成長が見られたが、何よりも表情が次第に生き生きと変化し、効果が確実に表れたことが感じられた。

実践終了後の対象児達のレッスンでは、年齢のわりに難しい楽曲に取り組んでいる。歌声の高音の響きが乏しく、音楽的な表現が不足していた対象児達が、実践の指導効果により気持ちが先行する表現ができるようになったことで、豊かな響きのある声で歌えるようになり、自信にもつながっていく現象がみられている。

4. 総合考察とまとめ

4-1. 総合考察

本研究では、身近な音を擬音語により表現することを音楽表現に繋げるための、段階的・継続的な指導について検討する実践研究を行った。事例からは、幼児が擬音語で身近な環境の音を主体的に表現することに意欲的に取り組む姿がみられた。日常的に聞いている音に耳を傾けることと、それを模倣するための擬音語表現というところが、感覚的な楽しさに繋がり、表現することへの意欲向上に至ったと考えられる。

このような効果が得られた要因として、表現する事象が幼児の身近なものであったことと、表現の手段が幼児にとって容易であり、楽しさに繋がったことで達成感を得られたことが、その後の活動への意欲に繋がったと考えられる。この点に関しては、矢部（前出）が明らかにした二つの結論から裏付けることができる。また、駒・古山他（前出）が「人的環境としての応答性」として挙げた、「応答的な音楽活動を行うことの重要性」「環境設定の重要性」を達成することができたのも、今回の指導効果を上げることができた要因となったであろう。

今回の事例では、幼児同士の直接的なコミュニケーションは見受けられなかったが、「①フレーズ作り」の場面では、対象児 A と B が扱っている擬音語に共通している部分も見られる。これについては、どちらかが発した擬音語を相手が聞いていたことで、自己の

表現に取り入れ、さらに自身の表現を充実させる要素として発展させたのだと考える。間接的ではあるが、複数人数で活動したからこそ起こり得る事象であり、無意識的に起きたコミュニケーションであると考えられることができる。このような事象が、自己の経験の充実を引き上げることになり、表現を豊かにしていくことに繋がっている。

また、擬音語により身近な音を表現する活動は、擬音語が、芋坂（前出）のいう「“感覚のこぼれ”あるいは“クオリアのこぼれ”」となり、幼児達の表現のツールとして獲得されたと考える。このことは、音楽を抽象的なものではなく、自己を通じた感性として捉える力になったことで、歌唱表現をより音楽的にすることの一助に繋がったのではないかと考える。

以上のことから、幼児の音楽表現において擬音語による表現活動を導入とし、実際の歌唱指導に繋げていくことで、音楽的な感性を育成することに大きな効果を挙げられることが明らかとなった。

4-2. まとめ

本研究の実践で明らかとなったことは、保育において音楽表現を充実させることや、幼小接続を見据えた音楽的感性を育成することの、手段のひとつとすることができる。もちろん、本研究は事例の一つであり、別の幼児が対象であれば違う結果が導かれるかもしれないことは否めない。また、保育現場で行った場合は、プロセスにもっと時間がかかるか、同じような結論に至らない場合もあるかもしれない。しかし、今回の実践研究は、擬音語による表現をすることだけに留まらず、歌唱表現と併用することで音楽的な表現をより充実させることができたことに意義がある。

本研究では、幼児期においてこのような段階的・継続的な指導を試みるのが、幼児の主体的な表現を引き出し、音楽的表現をも充実させることができる道筋のひとつを示すことはできたであろう。本研究のような事象は、保育現場において音楽表現を豊かにする活動の段階的・継続的指導を考えていく上で、プロセスのひとつとなると考える。

本論文を執筆するにあたり、1、3-1・3・4、4は長谷川が担当し、3-2・5・6は前田が担当した。

参考文献

- 荳坂直行 (2008) : 「感性の認知脳科学—擬音語・擬態語の脳内表現—」(特集 おのまとべ)、『國文學—解釈と教材の研究—』、10月号、學燈社、pp.50-57
- 駒久美子、古山律子、味府美香、木村充子、坪能由紀子 (2009) : 「幼児の創造的な音楽活動の開発に関する研究Ⅲ—人的環境としてのリーダーや保育者の応答性—」、日本女子大学『日本女子大学大学院紀要 家政学研究科・人間生活学研究科』、第15号、pp.1-8
- 千田恭子 (2011) : 「年中児の音環境についての探索的研究—年中児と保育者の音に関する発話に着目して—」、富山大学『人間発達科学部紀要』、第6巻第1号、pp.73-82
- 長谷川恭子 (2016) : 「1-5 子どもの育ちからみる表現」、今井真理編著『保育の表現技術実践ワーカー—かんじる・かんがえる・つくる・つたえる—』、保育出版社、pp.17-20
- 藤沢望、岩宮眞一郎、高田正幸 (2004) : 「擬音語からイメージされる音に関する研究」、社団法人電子情報通信学会『電子情報通信学会技術研究報告』、Vol.103 No.750、pp.19-24
- 矢部智子 (2008) : 「擬音語を用いた幼児の音楽的表現—『ねごっこ』の事例から—」、兵庫教育大学幼年教育コース『幼年児童教育研究』、第20号、pp.55-64